令和６年度秋田県総合政策審議会
第１回 観光・交流部会
（議事要旨）

１　日時　　令和６年５月 23 日（木）午後３時 30 分～午後５時

２　場所　　秋田地方総合庁舎６階　610 会議室

３　出席者（敬称略）

【観光・交流部会委員】

吉澤　清良・・・・・立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部教授
黒川　花子・・・・・株式会社千葉旅館　取締役
守屋　奈美・・・・・有限会社石孫本店　総務企画・海外担当
豊田　哲也・・・・・国際教養大学　中嶋記念図書館長・教授

【県】

観光文化スポーツ部　次長　佐々木　重夫
　　次長　伊勢　弘
　　次長　鈴木　雄輝　ほか関係課室長等

４　部会長の選出及び部会長代理の指名

部会長に吉澤委員を選出し、部会長代理に豊田委員を指名。

５　佐々木観光文化スポーツ部次長あいさつ

県政の運営指針である新秋田元気創造プランについては、令和４年度から７年度を計画期間としており、今年度が折り返しの年度となっている。当部会の担当は、「観光・交流戦略」であり、「交流人口の拡大を通じた社会経済の活性化」が最大のミッションである。

我が国の観光需要は大きく高まっているものの、本県は全国に比べて回復が遅れている。魅力的なコンテンツづくりや情報発信のほか、深刻化する人材不足への対応が急務であると認識しており、今年度は、冬季を中心とした体験型観光の推進や戦略的なインバウンド誘客、食品産業の競争力強化、文化芸術活動の促進、スポーツを通じた交流の拡大、交通ネットワークの維持・拡充などに積極的に取り組んでまいりたい

当部会は、観光、食、文化、スポーツ、道路及び交通と、幅広い分野を対象としており、限られた時間ではあるが、委員の皆様には、是非、闊達な意見交換をしていただき、多くの御意見・御提言をいただきたい。

６　議事

（１）令和６年度観光・交流部会の進め方について

□小松観光戦略課長

（部会のスケジュール等について、資料１により説明）

●吉澤部会長
ただ今の説明に、質問はあるか。
（なし）

（２）「新秋田元気創造プラン」戦略３の推進に係る令和６年度の主な取組について

□小松観光戦略課長
（観光文化スポーツ部　今年度の主な取組について、資料２－１により説明）

□大森道路課政策監
（建設部　今年度の主な取組について、資料２－２により説明）

□備前港湾空港課長
（建設部　今年度の主な取組について、資料２－２により説明）

□大高自然保護課チームリーダー
（令和６年度生活環境部重点施策と基本施策（抜粋）、資料２－３により説明）

●吉澤部会長
主な取組について説明いただいたが、具体的な提案についてはこの後の議事で伺うので、まずは質問や確認があればお願いする。
（なし）

（３）「新秋田元気創造プラン」戦略３の推進に係る施策の提言について

●吉澤部会長
観光交流部会が所管するプランの戦略３では、五つの目指すべき姿を掲げているため、順に意見を伺っていく。
まずは目指す姿1、何度でも訪れたくなる秋田について意見を伺う。
方向性①、稼ぐ観光エリアでは、令和６年度の主な取組として宿泊施設への支援が挙げられているが、具体的な提案や意見がある方はお願いしたい。

○黒川委員
昨年、県の補助金を活用し、主にインバウンド向けにベッドの部屋を３部屋改装している。改装の効果も出ており、大変ありがたい制度だった。
主な取組として、観光や交通事業者を対象とした人材育成・確保に向けた取組が挙げられているため、この件について発言する。
秋田県在住で観光業への就職を希望する若い世代はどの程度いて、その方々が何をきっかけに観光業に興味を持つのか、気になっている。仕事は、自分が好きだと思う職業に

就くことがお客様にとっても、自分にとっても望ましい。
　人と触れ合うことが好きな方が秋田で増え、そういった方に観光業に就いてほしい。こういった切り口で幼少期からの人材育成を進めていければ良い。

●吉澤部会長
　人材育成・確保について意見を伺いたい。特に観光・サービス業では、多くの女性が活躍されている。人手不足が深刻になってる昨今、女性の活躍という観点で何か留意されていることはあるか。

○黒川委員
　旅館業においては、以前からサービス担当である客室係のほとんどが女性であり、既に女性も男性同等に活躍している職場であると感じる。女性活躍に向けてどういった取組ができるかは悩ましいが、有給休暇が取りやすい環境づくりには配慮している。観光業は土日に休みづらい傾向があるが、子どもの行事やプライベートの予定がある場合は積極的に休み希望を出すように伝えている。

●吉澤部会長
　働き方改革について、経営者の意識も重要と感じているが、その点はどうか。

○黒川委員
　もともと旅館で生まれ、親がどちらも毎日休みなく仕事している、という環境で育った。そのため観光業に就くに当たっては、休みが取りやすい、家族との時間をとれる環境づくりが必要だと考えている。また、観光業に就いている方にとっては、他の観光地へ旅行することも必要。

●吉澤部会長
　方向性②、ターゲットの的確な把握と効果的な誘客プロモーションの展開について意見を伺いたい。
　インバウンドが注目を集めているが、秋田の観光の活性化にとってもやはりインバウンド誘客は大きな位置づけとなる。ターゲットの的確な把握と誘客プロモーションについては、インバウンドにおいても重要な観点だと考えるが、この点について意見をいただきたい。

○豊田委員
　47 都道府県は一つ一つが個性豊かだと、我々日本人は思っているが、外国人観光客から見れば、近くの県は似たようなものである。自分が外国人観光客として外国を訪れることを想像してほしい。例えば、フランスには 100 個の県があるが、ビエンヌ県という県を知っている海外観光客はほとんどいない。ビエンヌ県が「何度でも訪れたくなるビエンヌ県」といったスローガンで自然を前面に出したＰＲを行っても、外国人観光客に

は近隣県の違いが分からない。それだったら、世界的に有名なラスコーの洞窟のあるドルドーニュ県に行こうかということになる。そうしたものがないビエンヌ県も隣のアンドル県もシャラント県も外国人観光客にとっては似たようなものである。似ている地域であれば、宿泊サイトで比べて、安いホテルがある方に行ってしまう。世界中でそこにしかないものが重要であり、スローガンや綺麗な写真集だけでは観光客を呼べない。

また、観光の基本として、遠方から来た方の旅行単価が高い。

近隣県への旅行で宿泊施設に 10 万円は抵抗感があるが、海外旅行となるとそれほど抵抗感はない。秋田の場合、宿泊施設のキャパシティがそれほど大きくないため、インバウンド含め遠方からの観光客を増やして旅行単価を上げるという戦略は選択肢としてあると思う。

遠方から観光客を呼ぶためには、秋田にしかないものが必要。料理や温泉などは、隣県にもあるため、それ自体では切り札になりづらい。秋田にしかないものがあり、加えて温泉や料理もレベルが高い、というプロモーションができると良い。

日本には 147 のストーンサークルがあるが、日本最大のストーンサークルは鹿角市大湯にある。例えば、こういった点をもっと打ち出してはどうか。

さらに、いまだあまり知られていないが、秋田城には日本最古の水洗トイレがある。その水洗トイレの残存物から、当時の人々が食べていた食事の内容が明らかになり、それによって、対岸のウラジオストックとの人的交流が確認されたというストーリーもある。

例えば、歴史に興味がある中華圏の方がこういった情報を知っていれば、日本旅行の選択肢は、太宰府か秋田城かの二択になるのではないか。太宰府には水洗トイレの遺跡はなく、太宰府の鴻臚館よりも、秋田城の迎賓館の方が、100 年ほど古い歴史がある。太宰府には多くの観光客が訪れており、秋田城にもその可能性があるのではないか。

また角館は、小京都としてＰＲを行っているが、海外からの観光客が小京都と京都を比べると、京都に行ってしまう。ＰＲポイントは、江戸に次ぐ日本最大級の広い武家屋敷通りが残っている、という点ではないか。

日本酒について言うと、秋田の日本酒は、現在の日本酒の元祖と言える。理由としては、全国で使用されてる６号酵母の発祥が秋田だから。日本酒に興味がある外国人観光客にとっても、元祖が秋田であるという点は大きなＰＲポイントとなる。

●吉澤部会長

そこにしかないもの、についてもう一度考え直す必要がある、という御意見をいただいた。

続いて、方向性③、時代の変化を捉えた秋田ならではのツーリズムの推進について意見を伺いたい。石孫本店では、様々な観光客の受入を進めていると思うので、御意見をお願いしたい。

〇守屋委員

石孫本店では、2018 年に県の発酵ツーリズムの拠点施設ということで整備を行った。

蔵見学ができるよう、ポイントとなる場所へＱＲコードを掲示し、コードを読み取ると日本語と英語で説明対応が出来るようになったほか、ショップや体験スペースも整備しており、味噌ボールづくりやせんべい焼き体験を実施している。また、土曜日限定でラーメンの販売も開始した。

地元客のほか、県外客も増えてきており、団体客も増えている。個人客では、少人数だがフランスやアメリカからの来客がある。

●吉澤部会長

目指す姿２の美酒・美食のあきたにも関わる部分だが、ブランド化やオリジナル商品の開発、人材育成に関する取組が示されている。食品産業の振興について、どういった支援が必要かという点で御意見をいただきたい。

○守屋委員

現在 10 人ほどの社員で営業しており、年代は 20～60 歳代と幅広い。年齢が上の方はリタイアが見えてきており、技術を受け継ぐ人材の確保に不安がある。

醸造関係の仕事は肉体的に厳しい部分もあるため、体力があり醸造関係に関心がある人材を探している。

県南部には味噌醤油屋のほか、酒蔵も多くある。こういった分野を学ぶ環境づくりができると良い。興味がある方が集まる場となり、就職や定住につながっていくのが理想。

●吉澤部会長

県南部の醸造文化を市場に認知してもらう必要がある。

販路拡大や情報発信の観点から、苦労していることがあれば教えてほしい。

○守屋委員

情報発信について、石孫本店においてはホームページと Facebook、Instagram、YouTube を行っており、全て日本語と英語に対応している。

販路の拡大については、ＨＡＣＣＰやＦＤＡなど輸出に必要な認証取得への支援があるとありがたい。

●吉澤部会長

認証取得に限らず、手続き関係は煩雑なものが多いため、そういった支援は必要かもしれない。

目指す姿１の方向性③における主な取組として、食を活用した宿泊プランについて記載されている。旅館における食の提供について、工夫している点や困っている点があれば、黒川委員から発言をいただきたい。

○黒川委員

食に関しては、秋田に今どんなものがあるのか、どんなものを旅館としてお客様に提

供できるか、について常に情報にアンテナを張っており、それを、少しずつ取り入れながら、季節でメニューを変えるなどの工夫をしている。食事に対するお客様からの評価は見えづらいため、チェックアウトの際に話しかけて、聞き取りを行っている。

また、例えば、秋田県内に２～３泊するお客様の場合、他と食事の内容が重ならないよう、予約の時点で聞き取りを行うなどの配慮もしている。

食事については、お客様のニーズに合わせることが大切であり、そのためには、どういった選択肢があるか情報収集する必要がある。業者向けなどで、新商品も含め、秋田県内にどういったものがあるのか探しやすいサイトや仕組みがあるとありがたい。

●吉澤部会長

方向性の⑤、インバウンド誘客について豊田委員からの御意見を伺いたい。

○豊田委員

インバウンドに限った内容ではないが、秋田の商品については、内容やその魅力に関しての説明が足りていないと感じている。

例えば、日本酒のボトルについて、ラベルを見ても詳しい説明が少ない。ラベル等から商品のストーリーを読み取れることが大切。商品を他人に薦める際にも、そういった情報があると薦めやすい。商品の質だけでなく、その質をどのように紹介するかも考える必要がある。

●吉澤部会長

目指す姿３、文化芸術の力による魅力ある地域の創生について意見を伺いたい。ミルハスを活用したにぎわいづくりや次代を担う人材の確保、文化芸術を通じた交流人口の拡大、という観点で御意見を伺いたい。劇場で行う文化芸術だけではなく、市町村や集落の伝統芸能的なものも含まれると思うが、いかがか。

○黒川委員

方向性②に記載されている、小中高生を対象とした質の高い音楽・美術に触れる機会の提供について意見を伺いたい。

新秋田元気創造プランでは、10 年後の姿として、個性が尊重され、一人ひとりが活躍する姿が示されている。

小中高生が触れる芸術や音楽、アートは、特に質が高くなくてもいいのでは、と感じることがある。学校教育を否定するものではないが、自身の娘を見ていても、学校に入る前は、自由な感性で作品を作っているが、小学校に入ると、ある程度型にはまってしまう、という思いがある。

例えば、どこに落書きしても良いなど、好きな人が自由にアートを楽しめる環境やイベントがあっても良いと思う。

●吉澤部会長

文化レベルの底上げや関心を持つきっかけづくり、という観点からの意見をいただいた。県民の文化レベルを上げていくことで、将来的には誘客につながるという位置づけかと思う。

○豊田委員

文化関係では、秋田県は47都道府県の中で、最も重要無形民俗文化財の多い県である。重要無形民俗文化財をはじめ、民俗行事は観光コンテンツとして認められており、六郷の竹打ちは既にオーバーツーリズムの状態になっている。すぐに経済効果に結び付かない場合もあるが、そういった認識は必要。

国際教養大学では、10年以上前になるが県内の300以上の民俗芸能行事についてデータベースを作成し、インターネットに公開している。日本語のほか、各種外国語にも対応しているため、是非活用してほしい。

●吉澤部会長

目指す姿４、スポーツ立県秋田について意見を伺いたい。

ライフステージに応じた多様なスポーツ活動、地域づくりと交流人口・関係人口の拡大、アスリートの発掘と育成・強化、スポーツ活動を支える人材の育成と環境整備、大きく四つの観点がある。

この部分については、県民のスポーツ振興を主として、観光誘致が副次的に入ってくるという位置づけと認識している。

委員が住んでいる地域で、スポーツ活動に熱心である、あるいは指導者不足である、など御意見をいただきたい。

○黒川委員

鹿角市には、ジャンプとクロスカントリー、アルペン全ての競技をできるスキー場があり、毎　年のようにインカレや国体が開催される。冬季の開催のため、集客があるのは非常にありがたい。

大湯地区には、以前はスキー場として営業していた山があり、スノーボードの流行を受け、こういったものを活用して集客につなげられればという声を聞くことはある。

●吉澤部会長

指導者の確保についてはどうか。

○黒川委員

指導者が減少しており、大会の運営も年々大変になっているという声はある。

●吉澤部会長

スキー人口は全盛期の４分の１程度に減少しているが、その割にスキー場の数は減っておらず、運営が難しくなっている現状がある。利用者だけでなく、指導者の不足も問題

となっていることが分かった。

〇守屋委員

部活動の地域移行については学校からお知らせが来ているが、内容について、送迎の問題、部活動を行う場所の問題など少し分かりづらい部分がある。

先生がつかないとして、学校を使えるのか、そういった細かい部分が示されていない。一方で、いつまでに地域移行する、ということは決まっているため不安を感じている。保護者や生徒、指導者、教職員などの意見をもっと集約してもよいのではないか。Google アンケート機能など使えばそれほどの負担はないはず。

教師の負担も考えると、地域移行には反対しないが、進めるに当たってはもう少し細かな配慮がほしいと感じている。

□樋口スポーツ振興課長

小中学校の部活動の地域移行については、令和７年度までに地域移行を終えるという国の大きな方針があり、県教育委員会が基本的な指針を示し、市町村の教育委員会で具体的に進めることになっていると認識している。

先行して進めている市町村もあれば、今まさに議論している市町村もある。スポーツ振興課としても、教育委員会と意見交換しながら進めている部分もあるため、いただいた御意見については、教育委員会に伝えていきたい。

●吉澤部会長

目指す姿５、交通ネットワークについて意見を伺いたい。大きく五つの方向性が示されているが、御意見はどうか。

〇豊田委員

県全体の方向性として、賃金向上やデジタル化、カーボンニュートラルを掲げているが、カーボンニュートラルに関する施策が少ないように感じている。

カーボンニュートラルで一番重要な点は、自家用車の使用を減らすこと。国が示す脱炭素ロードマップにおいても、一つの重点対策として公共交通を軸としたコンパクトなまちづくりが挙げられている。産業部門の二酸化炭素排出量を減らすのは難しく、日本の二酸化炭素排出量の中で削減に一番取り組みやすいのは自家用車の使用を減らすことだと考えている。

日本全国の 2019 年の数値で、全排出量のうち乗用車の家庭利用が 5.6%を占めている。つまり、公共交通の利用によりその 5.6%分がなくなれば、日本の二酸化炭素排出量を 5.6%減らすことができる。

秋田県の数値を試算したところ、排出量のうち乗用車の家庭利用が 7.0%を占めており、その 7.0%は、家庭からの排出量の 23%を占めていることとなる。つまり、家庭から排出される二酸化炭素の４分の１は車の使用によるものとなっている。

車がないと通勤や通学ができない地域もあることは認識しているが、この部分を削減

できれば効果は大きい。県民への理解が広がれば、車をやめてバスを利用しようとする方が増えるのではないか。

温暖化対策として、県でもＳＮＳやYouTubeで情報発信は行っているが、公共交通の二酸化炭素削減効果には触れていない。県としては、マイカー通勤がどれほど環境負荷をかけているのか周知、啓蒙する必要がある。

選択・集中プロジェクトとしてカーボンニュートラルを掲げているのであれば、予算措置としても一定の配慮があってもよいのではないか。

●吉澤部会長

全国的に路線バスなどの公共交通の利用者は減少傾向にある。カーボンニュートラルの観点から、住民には利用を促したり、事業者には運行の下支えをするなど、支援策を見直す必要はあるかもしれない。

アクセス面が整っているとは言えない地域もあると思うが、新幹線や航空路線、在来線も含めて意見があれば伺いたい。

〇黒川委員

鹿角市の状況だが、例えば当館ではＪＲの十和田南駅が最寄り駅になる。車で10分程の位置にあり、送迎する場合もあるが、お客様の９割以上は自家用車でいらっしゃる。そのため、公共交通が整っていないための困り事は少ない。電車を使いたい、という問い合わせもあるが、秋田方面や盛岡方面からのアクセスを考えると、ダイヤの接続はあまり良くない。

また、バス運行が少ない地域で公共交通機関の利用を促すのであれば、小型バスや循環路線など、地域の状況に応じた仕組みが必要になる。

●吉澤部会長

地元住民の足としては公共交通の利用を促進する場合、まだ課題が多い部分もあるかもしれない。湯沢市の状況はどうか。

〇守屋委員

基本的には車生活となっている。

隣の横手市のスーパーでは、送迎バスを運行している事例もある。

●吉澤部会長

主な取組としてライドシェアの記載があるが、こういった言葉が話に挙がることはあるか。

〇守屋委員

言葉としては聞かないが、その動きはある。先ほどのスーパーの事例では湯沢市からの利用者も多い。

●吉澤部会長

交通関係の問題で言うと、秋田まで来る飛行機や新幹線という１次交通は引き続き維持してもらいたい。また、２次交通については、観光客と地元住民の利用の両面から考えていく必要がある。

本日は目指す姿１から５について全般的にお話を伺った。次回は更に細かく伺っていきたい。委員においては、プランに示している方向性に沿って、本日扱えなかった部分での意見をまとめておいてほしい。

そのほか、発言があればいただきたい。

○豊田委員

新日本海フェリーの利用に関して、Google マップで検索した際に交通手段として検索されない。秋田から新潟に行く場合、フェリーの利用が一番便利だと思っているが、ほとんど知られていない。Google マップの検索に出てくれば利用しやすいと思うので、県から働きかけができないか。

□信太交通政策課長

新日本海フェリーに伝達する。

【閉会】